

第3章 ハイブリッドシミュレーション法

3.1 定式化

電子とイオンの特徴的な運動時間、空間を比べた場合、はるかに、電子の方が、速く、短い。そこで、注目するプラズマ現象が、イオンによって主に生じていると分かっている場合、すなわち、現象の時間と空間スケールがイオンの運動程度と分かっている場合は、電子の運動論的効果を陽に解かないシミュレーションを行うことができる。この手法を、ハイブリッド (HYBRID) 法と呼ぶ。そこでは、イオンを粒子で扱う一方、電子を電荷中性を瞬時に行う流体として扱う。瞬時に行うためには、慣性を持ってはならないので電子の質量は 0 となり、光速は無限大となる。式で表すと、

$$\rho_e = \sum_{i=ion} \rho_i \quad (3.1)$$

$$\frac{M_p}{m_e} \rightarrow \infty \quad (3.2)$$

$$\frac{c}{V_A} \rightarrow \infty \quad (3.3)$$

まず、ハイブリッド法で用いる方程式系を導入するために Maxwell 方程式 (2.1 - 2.2) と次の電子流体要素に対する運動方程式の規格化を行う。

$$m_e N_e \frac{d\mathbf{V}_e}{dt} = -e N_e (\mathbf{E} + \mathbf{V}_e \times \mathbf{B}) - \nabla P_e \quad (3.4)$$

規格化定数は、

速度	\mathbf{V}	\rightarrow	$\tilde{\mathbf{V}}$	V_A
時間	t	\rightarrow	\tilde{t}	$\frac{t}{\Omega_i}$
長さ	x	\rightarrow	\tilde{x}	$\frac{V_A}{\Omega_i}$
磁場	\mathbf{B}	\rightarrow	$\tilde{\mathbf{B}}$	B_0
電場	\mathbf{E}	\rightarrow	$\tilde{\mathbf{E}}$	$V_A B_0$

$$\begin{array}{ll} \text{密度} & \rho \rightarrow \tilde{\rho} \rho_0 \\ \text{圧力} & P \rightarrow \tilde{P} \frac{B_0^2}{2\mu_0} \end{array}$$

を用いる。Maxwell 方程式 (2.1 - 2.2) を規格化すると、

$$\frac{\partial \tilde{\mathbf{E}}}{\partial \tilde{t}} = \left(\frac{c}{V_A}\right)^2 (\tilde{\nabla} \times \tilde{\mathbf{B}} - \tilde{\mathbf{J}}) \quad (3.5)$$

$$\frac{\partial \tilde{\mathbf{B}}}{\partial \tilde{t}} = -\tilde{\nabla} \times \tilde{\mathbf{E}} \quad (3.6)$$

となり、式 (3.5) において、式 (3.3) を満足し、かつ、左辺が有限値になるためには、

$$\tilde{\nabla} \times \tilde{\mathbf{B}} - \tilde{\mathbf{J}} = 0 \quad (3.7)$$

でなければならない。

電流は、

$$\tilde{\mathbf{J}} = \sum \tilde{\rho}_i \tilde{\mathbf{V}}_i \quad (3.8)$$

$$= \tilde{N}_e \tilde{\mathbf{V}}_e + \sum_{ion} \tilde{\rho}_i \tilde{\mathbf{V}}_i \quad (3.9)$$

と定義されるため、電子の流体速度は、式 (3.7) を使って、

$$\tilde{\mathbf{V}}_e = (\tilde{\mathbf{J}} - \sum_{ion} \tilde{\rho}_i \tilde{\mathbf{V}}_i) / \tilde{N}_e = \frac{1}{\tilde{N}_e} \left(\sum_{ion} \tilde{\rho}_i \tilde{\mathbf{V}}_i - \tilde{\nabla} \times \tilde{\mathbf{B}} \right) \quad (3.10)$$

と求まる。

次に電子流体の運動方程式は、

$$\frac{d\tilde{\mathbf{V}}_e}{d\tilde{t}} = -\left(\frac{\tilde{M}_p}{\tilde{m}_e}\right)(\tilde{\mathbf{E}} + \tilde{\mathbf{V}}_e \times \tilde{\mathbf{B}} + \frac{1}{2\tilde{N}_e} \tilde{\nabla} \tilde{P}_e) \quad (3.11)$$

となり、式 (3.2) を満足し、かつ、左辺が有限値になるためには、

$$\tilde{\mathbf{E}} + \tilde{\mathbf{V}}_e \times \tilde{\mathbf{B}} + \frac{1}{2\tilde{N}_e} \tilde{\nabla} \tilde{P}_e = 0 \quad (3.12)$$

でなければならない。

したがって、電場は、

$$\tilde{\mathbf{E}} = -\tilde{\mathbf{V}}_e \times \tilde{\mathbf{B}} - \frac{1}{2\tilde{N}_e} \tilde{\nabla} \tilde{P}_e \quad (3.13)$$

と求まる。

つまり、電子の流体速度と電場の値は、時間積分を行い求めるのではなく、各時

間で、他の変数から求める。

電子の圧力勾配は、状態方程式から求める。例えば、断熱変化を仮定した場合、比熱比 γ を用いて

$$\tilde{P}_e \tilde{N}_e^{-\gamma} = \text{const.} \quad (3.14)$$

から求める。イオンの各粒子については、以下の運動方程式を解く。

$$\frac{d\tilde{\mathbf{v}}_i^\sharp}{d\tilde{t}} = \left(\frac{\tilde{Z}_i}{\tilde{M}_i} \right) (\tilde{\mathbf{E}} + \tilde{\mathbf{v}}_i^\sharp \times \tilde{\mathbf{B}}) \quad (3.15)$$

まとめると、解き進めて行く方程式は、(以降、~記号を省略)

$$\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} = -\nabla \times \mathbf{E} \quad (3.16)$$

$$\mathbf{E} = -\mathbf{V}_e \times \mathbf{B} - \frac{1}{2N_e} \nabla P_e \quad (3.17)$$

$$\mathbf{V}_e = \frac{1}{N_e} \left(\sum_{ion} \rho_i \mathbf{V}_i - \nabla \times \mathbf{B} \right) \quad (3.18)$$

$$N_e = \sum_{ion} \rho_i \quad (3.19)$$

$$\frac{d\mathbf{v}_i^\sharp}{dt} = \left(\frac{Z_i}{M_i} \right) (\mathbf{E} + \mathbf{v}_i^\sharp \times \mathbf{B}) \quad (3.20)$$

である。

\mathbf{E} 、 \mathbf{B} 、 \mathbf{V} 、 P_e 、 N は、空間上に定義したグリッド上でのみ定義される。また、Full-Particle 計算の時のような半グリッドずらした場所での変数の定義は無い。

3.2 タイムチャート

まず、時間 $t^n = n\Delta t$ で、粒子の位置 x^n 、グリッド上での磁場 $B^n(j)$ 、イオンの密度 $N_i^n(j)$ が分かっていて、 $t^{n+1/2} = (n + 1/2)\Delta t$ で粒子の速度 $v^{n+1/2}$ が分かっていたとする。ここで、 j は、グリッド位置 $j\Delta x$ を表すとする。leap-frog 法でイオン粒子を時間的に進めるため、イオン粒子の位置と速度の情報は、時間的にずれて定義する。

STEP 1: $t = t^n$ でのグリッド上でのイオンフラックス $F_1^n(j)$ を求める。

$$F_1^n(j) = v^{n+1/2} \sum_{\sharp} S(x^n - X(j)) \quad (3.21)$$

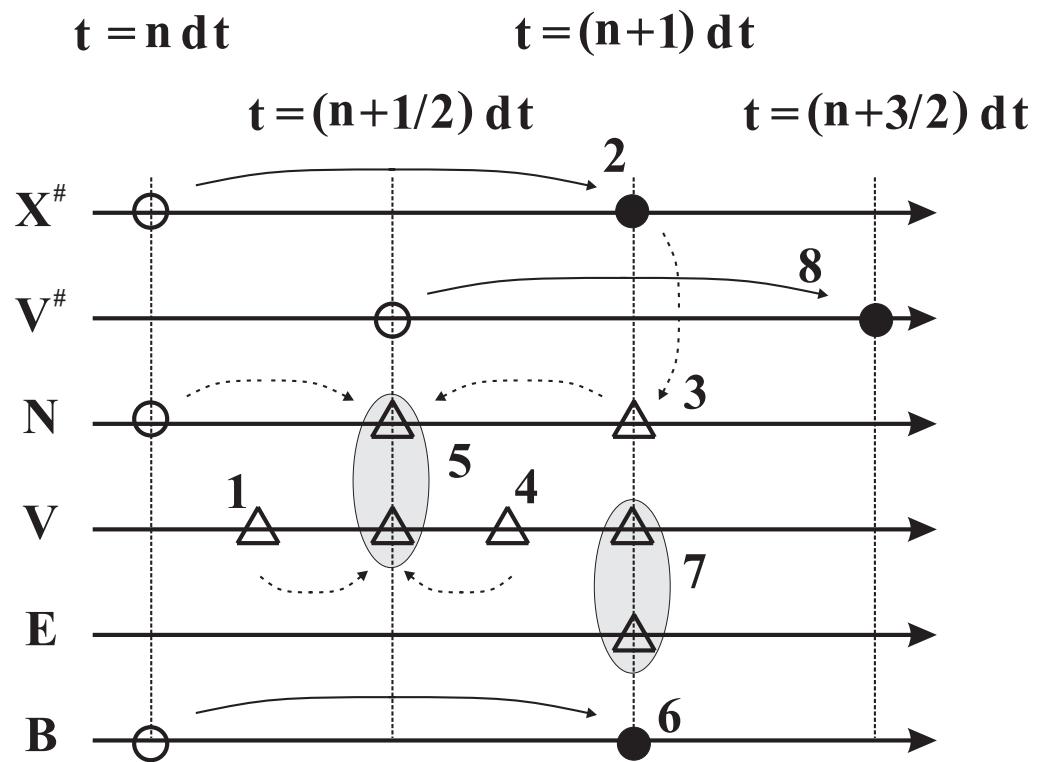


図 3.1: 時間の進め方。 の時間での値は既知。 の値は、 から時間を進めるこ
とによって求める。 の値は、他の量から求める。

STEP 2: 粒子の位置を進める。

$$x^{n+1} = x^n + v^{n+1/2} \Delta t \quad (3.22)$$

STEP 3 & 4: $t = t^{n+1}$ でのグリッド上でのイオンの数密度とフラックスを求める。

$$N^{n+1}(j) = \sum_{\sharp} S(x^{n+1} - X(j)) \quad (3.23)$$

$$F_2^{n+1}(j) = v^{n+1/2} \sum_{\sharp} S(x^{n+1} - X(j)) \quad (3.24)$$

STEP 5: $t = t^{n+1/2}$ でのイオンの数密度、速度、イオン電流を求める。

$$N^{n+1/2} = (N^n + N^{n+1})/2 \quad (3.25)$$

$$\mathbf{V}^{n+1/2} = (F_1^n + F_2^{n+1})/(2N_i^{n+1/2}) \quad (3.26)$$

$$\mathbf{J}^{n+1/2} = \sum_{ion} Z_i N^{n+1/2} \mathbf{V}^{n+1/2} \quad (3.27)$$

STEP 6: 磁場を進める。後述の有理ルンゲクッタ法を使う。

$$\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} = -\nabla \times \mathbf{E} \quad (3.28)$$

STEP 7 & 8: 粒子の速度を進める。

$$\frac{v^{n+3/2} - v^{n+1/2}}{\Delta t} = \mathbf{E}'^{n+1} + \frac{v^{n+3/2} + v^{n+1/2}}{2} \times \mathbf{B}'^{n+1} \quad (3.29)$$

ここで、

$$\mathbf{E}'^{n+1}(j) = \sum_i \mathbf{E}^{n+1} S(x^{n+1} - X(j)) \quad (3.30)$$

$$\mathbf{B}'^{n+1}(j) = \sum_i \mathbf{B}^{n+1} S(x^{n+1} - X(j)) \quad (3.31)$$

は、粒子の存在する位置での電場と磁場の値である。

また、 \mathbf{E}^{n+1} は、

$$\mathbf{E}^{n+1} = -\mathbf{V}_e^{n+1} \times \mathbf{B}^{n+1} - \frac{1}{2N_e} \nabla P_e \quad (3.32)$$

$$= -\frac{1}{N_e} \left(\sum_{ion} Z_i N_i^{n+1} \mathbf{V}_i^{n+1} - \nabla \times \mathbf{B}^{n+1} \right) - \frac{1}{2N_e} \nabla P_e \quad (3.33)$$

から求め、 V_i^{n+1} は

$$\mathbf{V}_i^{n+1} = a_1 \mathbf{V}_i^{n+1/2} + a_2 \mathbf{V}_i^{n-1/2} + a_3 \mathbf{V}_i^{n-3/2} + a_4 \mathbf{V}_i^{n-5/2} \quad (3.34)$$

$$a_1 = 55/24, \quad a_2 = -59/24, \quad a_3 = 37/24, \quad a_4 = -9/24 \quad (3.35)$$

から求める。

3.3 有理ルンゲクッタ法 (Rational Runge Kutta method)

Wambecq によって提案された非線形のルンゲクッタ型積分法で、

$$\frac{dy}{dt'} = f(y, t') \quad (3.36)$$

のような時間に関する微分方程式においては、次式で表される。(2次精度の場合)

$$g_1 = f(y, t') \quad (3.37)$$

$$g_2 = f\left(y + \frac{\Delta t'}{2} g_1, t' + \Delta t'\right) \quad (3.38)$$

$$g_3 = 2g_1 - g_2 \quad (3.39)$$

全グリッドでの値の内積和を以下のように求め、

$$G_{11} = \sum_j (g_1, g_1) \quad (3.40)$$

$$G_{33} = \sum_j (g_3, g_3) \quad (3.41)$$

$$G_{13} = \sum_j (g_1, g_3) \quad (3.42)$$

これらを使って、 $\Delta t'$ 時間を進める。

$$y^{new} = y^{old} + \Delta t' \frac{2G_{13}g_1 - G_{11}g_3}{G_{33}} \quad (3.43)$$

この時の時間ステップ $\Delta t'$ は、シミュレーションの時間ステップ Δt とは独立であるため、必要に応じて細かくとることができる。(例 : $\Delta t' = \Delta t/4$)